

第2回大府市長寿社会懇話会

会 議 録

平成20年8月20日

第2回大府市長寿社会懇話会

- (1) 開催日時： 平成20年8月20日（水）午後3時30分から午後5時30分まで
- (2) 場 所： 大府市役所 2階 204会議室
- (3) 出席委員： 大島伸一氏、大沢 勝氏、大山尚雄氏、梶岡多恵子氏、堀田あけみ氏
- (4) 市出席者： 久野市長、岡村副市長、伊佐治健康福祉部長、池田健康福祉部次長
國生政策推進室長、広瀬高齢者支援室長、原田、舟橋
- (5) 傍 聴 者： なし
- (6) 取 材： 中日新聞社【長坂】
- (7) 会議内容
 1. 市長あいさつ
 2. 会長あいさつ
 3. 大府市の特徴的な健康福祉政策等について
 4. ウェルネスバレー構想について
 5. 意見交換「人生80年のライフプラン」
 6. その他

開 会

【広 瀬】

皆様、本日はお忙しい中、ご出席いただきまして、ありがとうございます。ただいまから、第2回大府市長寿社会懇話会を始めます。

本日は、前回の宿題でありましたウェルネスバレー構想について、ご説明申し上げるため、担当課職員が出席させていただいておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず、大府市長久野孝保から、ご挨拶させていただきます。

1. 市長あいさつ

【市 長】

お忙しいところありがとうございます。今年はことのほか暑いですね。大府市では天気だけでなく、熱い事情があります。8月に大府高校が甲子園に出場し、熱狂いたしました。また、地元中京女子大学のレスリング。金メダル二つ、銀メダル一つと活躍されました。オリンピックでも熱いです。市を挙げて大変盛り上がっています。

長寿社会については、切実な問題、緊急の問題と捉えています。皆さんのお知恵をお借りして、よりよい社会を作りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

【広 瀬】

本日、前回の会議録と中日新聞等の記事をお配りいたしましたので、ご覧ください。

続きまして、前回欠席されました大沢勝様へ、市長から委嘱状を交付させていただきますので、よろしく願いいたします。

委嘱状交付

大府市長から大沢委員へ、委嘱状が手渡されました。

【広 瀬】

大沢様におかれましては、7月16日に行われました第1回の懇話会にて、副会長にご

指名されておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、大沢様からご挨拶を賜りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【大沢副会長】

前は、欠席いたしまして、申し訳ありません。ご迷惑をおかけしまして、まずはお詫びを申し上げます。

お役に立てるかわかりませんが、皆さんと一緒に議論させていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【広瀬】

ありがとうございました。次に、事務局側で、前回、欠席いたしました健康福祉部次長から自己紹介申し上げます。

【健康福祉部次長】

健康福祉部の池田です。よろしくお願いいたします。前は、1か月ほど、東京の自治大学校へ研修に行っていて欠席いたしました。今回から出席させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【広瀬】

それでは、会長のご挨拶をいただきたいと思いますが、ご挨拶の後、そのまま議事の進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 会長あいさつ

【大島会長】

第2回目の懇話会よろしくお願いいたします。前は、できるだけ共通理解の上に立つてと思っていたら、暗い話ばかりになっていた。後で、会議録を見ると、会長である私が話し過ぎていたのではないかと。私自身が、長寿医療センターで、どちらかという、高齢社会の暗いところばかり見ている、それを何とかしなければと思っているので、偏ってしまったのか。

しかし、この会は、あくまで、いかに客観的に厳しい状況を乗り越え、周りから見ても素晴らしい社会、高齢者にとっても住みやすく、明るい社会をどうやって作っていくかに目標があります。そういった議論をこれから積み重ねていき、具体的なイメージづくりに繋げていきたい。そういうのがこの会の趣旨であります。

今日からは、できれば、暗い話よりは明るい話を。暗い話を頭に置きながらも、いかに明るい方へ転化していくかに焦点をしばって、議論を進めていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

3. 大府市の特徴的な健康福祉政策等について

【大島会長】

それでは、議題の3の「大府市の特徴的な健康福祉政策等」について、事務局から説明をお願いします。

【原 田】

第1回の会議におきまして、大府市の事業及び認知症についてのお話が出ましたので、それを受けまして、今回、資料No.1とNo.2をご用意させていただきました。こちらをご覧いただきながら、原田から説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。資料No.1では、高齢者、次世代育成、健康、障害者、地域施設の5つの政策に分け、それぞれ、特徴的なものを載せました。時間の都合により、主なもののみご紹介いたしますので、また改めてご覧いただければと思います。

1の高齢者関連施策については、高齢者の生きがいの推進や閉じこもり防止を図るため、(1)の循環バス無料券の交付、(2)のプール・温泉等の料金助成を行っています。

また、(4)の相談事業におきましては、地域包括支援センターを拠点に、高齢者虐待、障害者支援等の相談を一括して受け、困難事例のワンストップサービスに努め、市民サービスの向上を図っています。

次に2の次世代育成施策です。(1)の子ども医療費の助成につきましては、平成19年10月から、中学校卒業までの医療費を無料としました。

次のページ、(2)の妊産婦・乳児健診におきましても、昨年から無料枠を拡大し、従来の5回から17回に増やしました。また、(4)につきましては、保育園に通う第3子の保育料を無料とし、子育て中の家庭の負担軽減を図っています。

次に3ページの健康増進関連施策です。(1)の特定健診ですが、大府市におきましては、従来から、国の基準項目に独自で項目を追加した形で実施しており、平成20年度から行われております特定健診におきましても、同様に充実した検査を実施しています。また、当分の間、国民健康保険以外の加入者等も受診を可能としています。

(3)につきましては、平成18年にWHO健康都市連合に加盟し、大府市の都市目標であります「健康都市」を目指し、様々な健康づくり事業を推進しています。

4の障がい者施策につきましては、障害者自立支援法に基づくサービス給付を補う形

で、大府市独自の支援を行っています。また、オストメイト対応型トイレ等の施設整備や、災害時に援護が必要な方に対して、行政と市民が協力して支援できるような環境整備を進めています。

最後に4ページの地域施設です。大府市は、児童老人福祉センター、公民館が、各小学校区に設置され、子どもから高齢者まで、誰でも気軽に利用できるよう整備されています。公共施設等へのエレベーターにつきましても順次整備を進めております。

資料No.1につきましては、以上とさせていただきます。

続きまして、資料No.2の「大府市における認知症高齢者の現状」について、説明させていただきます。

大府市の介護保険認定者を調査いたしましたところ、65歳以上の14人に1人が認知症であることがわかりました。

②のグラフを見ていただきますと、重度になるに従って、認知症の割合も増加し、要介護2で約半数、要介護5では、90%近い人が認知症となっています。

③は、認知症と診断された方の介護サービスの利用状況でございます。サービスを利用していない人も含め、全体の82%の人が、居宅で過ごしています。

簡単でございますが、以上で、説明を終わります。よろしく願いいたします。

【大島会長】

何か質問はありますか。

【大沢副会長】

障害者を持っている人、子どもたち、おじいちゃん、おばあちゃんは、暮らしの中でほとんど一つのステージで暮らしている。それぞれ相互に交流するプログラムがあってもいいのでは。

おじいちゃん、おばあちゃんは自分の子育てで、経験がある。現在子育てをしている人は、多世代で暮らしていないので、子育ての技術を引き継げる環境にない。技術だけではなく、子どもの面倒をみるという細かい積み重ねができにくい若い人たちがいる。そういう人たちがお互いに助け合うようなプログラムを。

また、障害者を持っている人たちの交流はどうか。障害者関連施設を建てようとする周辺住民から「困る」というような反応があることを聞くが、それは情報が共有できないため、お互いの理解が得られていないからだと思う。

子育てをしている人、障害者、年寄りが、それぞれの領域で、交流を持てるような事業が大府市にはありますか。例えば「老幼施設」といったものが。

【大島会長】

資料No.1 の地域施設(1)の「児童老人福祉センター」に、「児童センターが併設されており、児童と高齢者のふれあいの場となっている」とありますね。

【健康福祉部次長】

大島会長のおっしゃるとおり、児童老人福祉センターというものがございますので、高齢者と子どもの交流は行われております。また、デイサービスセンターと隣接保育園との交流も行われています。

しかし、障害者との交流については、なかなか進んではいないと思います。社会福祉協議会と大府市が協力して、高齢者と子どもの交流はいろいろな事業を行っており、マスコミにも取り上げられていますが。

【大沢副会長】

障害もいろいろありますから。要するに、基本姿勢として「交流の場」があるということが大事なことだと思います。

【市長】

児童と高齢者の交流の場として、児童老人福祉センターを建てましたけれど、実際は定まった運用プログラムがありません。その部分の反省を踏まえて、今、交流できるプログラムを検討しており、進めていきたいと思っております。

子どもと高齢者は行動パターンも違うので、交流することはなかなか難しい。システムを用意しないと、バラバラになってしまう。

【大島会長】

児童老人福祉センターの責任者は、どういう人がなっているのですか。

【健康福祉部長】

館長は、ベテラン保育士。もう一人は、児童厚生員ということで、少し若い保育士。合わせて2人で担っています。ソフトが不足しているので、今年度から力を入れまして、健常な子どもとお年寄り、交流が行われています。

障害者の交流については、桃陵高校の隣に「桃花校舎」というのができました。知的障害のある子が通っていきまして、来年3月に初めて卒業生が出ます。ここでは、年寄りのデイサービスで働けるような子を育てていこうという取り組みがあります。知的障害のある子と年寄りのリズムが合うということ。

【大沢副会長】

地域で、デイサービスセンターのようなところの活用を少し細かい単位でうまくやっていくといいですね。

【大島会長】

他にありませんか。

【梶岡委員】

3ページの(3)の WHO 健康都市連合への加入について、教えていただけませんか。近隣で他に加入しているところがありますか。

【健康福祉部長】

日本ではまだ少ないですが、市川市が事務局になっていて、大府、尾張旭、多治見、袋井、宮古島、名古屋が参加しています。

【梶岡委員】

加入条件は？どんなプログラムでもいいのですか？

【健康福祉部長】

どんなプログラムでもいいです。WHO は国際的な機関なので、衛生状態を改善しようというところから、大府市のように基盤ができていて、「健康を」というところもある。大府の場合は、派生したところでもう少しやっつけよう。「都市それぞれが目標を持って」ということで結成されたのが健康都市連合であります。

【市長】

昭和 62 年から大府市は「健康づくり都市宣言」をしている。それ以降、健康都市をキーワードにしてきた。しかし、マンネリ化してきたので、平成 18 年に WHO 健康都市連合へ加入をし、それを契機にもう一度、健康都市を見直そうというわけです。

世界を見渡すと全然違う。東南アジア等は、栄養状態が悪いとか、公衆衛生を何とかしようとか、そういう状態。一方、日本のようにメタボリックシンドロームをなくそうとか。全然テーマは、違うのですが、おおまかなくくりで、都市連合を形成しています。

【堀田委員】

「ウォーキングを始めとする健康事業」というのが、具体的につかめないのですが。

【健康福祉部長】

「健康づくり推進員」という市民の団体があります。その推進員を中心として、毎週土曜日に市内のどこかで、ウォーキング活動をしています。例えば、公民館に集まって、2キロくらい歩きましょうというような呼びかけをするわけです。

大府が他のところよりすごいのは、ほとんど毎週行われていることです。一人ではなかなか歩けないですから。

健康づくりは、「ウォーキング」と「食育」ということで、もう一つの市民団体で「食生活改善推進員」というのがあります。その2団体を柱に、ウォーキングと食育を進めています。

ハード的には、ウォーキングトレイルという歩ける道の整備を進めています。

【大島会長】

それは、WHOのプログラムなのですか。

【健康福祉部長】

プログラムではないです。プログラムはその都市その都市が作れば良いということで、決められたものは特にありませんが、加入をきっかけに、大府市なりの水準を目指そうと。「健康都市というのはこういうものだ」という世界標準があればいいのですが、現状はそのようなものさしが用意されていません。

4. ウェルネスバレー構想について

【大島会長】

次に、4の「ウェルネスバレー構想」について、説明をお願いします。

【國生室長】

政策推進室長の國生です。よろしく申し上げます。

議題4番目、ウェルネスバレー構想について、資料3をお願いします。その前に申し訳ありませんが、資料3の先頭より1ページから順に4ページまで付番をお願いします。

それでは、ただ今からウェルネスバレー構想の説明を始めます。

資料3の1ページをご覧ください。ウェルネスバレーには、現在、健康長寿分野の中核となるナショナルセンターである「国立長寿医療センター」や愛知県下に一つしかない「あいち小児保健医療総合センター」また、「あいち健康プラザ」など健康、医療、福祉に関する施設が約20団体もあり、国内でも有数の健康長寿分野の集積エリアでありま

す。これは、2ページに示されたウェルネスバレーの集積図のとおりであります。

もう一度、1ページをお願いします。1番目、「ウェルネスバレーの目的」として、このようなポテンシャルを最大限に活かし、健康長寿という情報を世界に向けて発信し、愛知県が目指す「健康長寿あいち」の実現を図っていかうとする壮大な構想であります。

なお、「ウェルネスバレー」の名の由来であります。これは、ウェルネスの概念を様々な角度から、サポートしたり、提案したり、あるいは情報発信するソフト、ハードを包含した地域の意味で、アメリカのシリコンバレーになぞって命名したものです。

2番目の「ウェルネスバレーの果たす役割」として、新たな産業の創出と雇用の拡大、及び観光や文化など様々な面でも、世界へ向けて情報や魅力を発信し、地域の活性化と発展を図るものであります。

ウェルネスバレーは以下の5つの役割をもち、①「コンソーシアム機能」、これは、健康長寿のモデル地域となり、世界へ健康関連情報を発信していきます。

次に②の「研究・製品開発機能」は、産・学・行政との連携・協働を図り、健康長寿に関する最先端技術の研究開発や新たな健康長寿関連産業の創出を推進します。

次に③の「製造、生産機能」は、世界レベルの研究開発機能とモノづくりの産業・技術を活かし、健康長寿やライフクオリティなど次世代産業のクラスター形成を目指していきます。

そして、④の「健康リゾート機能」は、健康な心と体の育成を総合的にサポートし、アメニティやリゾート環境の向上を図ります。

最後に⑤の「住宅形成機能」は、健康・医療・福祉・介護及び環境に配慮した、潤いのある豊かな生活空間を創造し、良好な住宅地の形成を図ります。

3番の「取り組み状況」といしたしましては、愛知県や関係機関と連携して、今や国民の悲願である、がん撲滅として、切らずに治す、がん治療の最先端施設である「重粒子線治療施設」の誘致や元気な高齢者が安心して生活できる「有料老人ホーム」など医療・福祉に関する施設の誘致を積極的に推進しております。

なお、今月23日（土）午後1時より市役所の多目的ホールにて、昨年に引き続き、愛知県と共催で「粒子線講演会」を開催いたしますので皆様のご参加のほど、よろしくお願ひします。

次に3ページをお願いします。昨年11月、大府市長と東浦町長が、共同でウェルネスバレー構想を推進して行くことについて基本合意し、庁内組織である、ウェルネスバレー推進事業実行委員会を設立しました。

今後のスケジュールは4ページに掲げてありますが、今年度につきましては、このウェルネスバレー構想をより実現可能なものにしていくために、関係機関と連携しながら大府市・東浦町が、ウェルネスバレー基本計画を策定していきます。現在はコンサルタ

ントも入れながら、コンセプトや土地利用など実行可能なプランとして検討を重ねているところでもあります。今後もウェルネスバレーを積極的に推進して参りたいと考えています。以上で説明を終わります。

【大島会長】

何か質問、意見はありませんか。

【大沢副会長】

前回、お話しする機会がありませんでしたので、少しお時間をください。こういう問題を考えるとき、二つ思うことがあります。

一つは、今住んでいる人たちのことです。ここに住んでいてよかった、あなたも来ないかと言えらるまにしていけるには、何がポイントかということ。健康、長寿都市を実現するには、細かい施策が必要だと思う。

もう一つは、ウェルネスバレー構想にあるように、モノがあって、人がいて、国際的にレベルの高い施設がある。研究、医療、福祉に関する施設がある。この健康長寿に関する大きな資源を大府市全体の都市計画に入れ込むと、どんな枠組みのものが考えられるかということ。

この二つのうち、ウェルネスバレー構想は、「二つめの問題に関してどうか」ということで話したいと思います。

資料に、「製造、生産、研究、製品開発」「世界的な健康長寿において新たな産業の創出」と書いてありますが、これはこれでよいと思います。しかし、こういったことを産業と結び付けてやろうとするときの産業の職種ですよ。何をメインにしてここをやろうかという、僕は、医療、福祉、健康と関わる企業の活動、研究、開発、生産だと思います。

それで、ここで考える民、産、官、学の連携といった都市づくりをするときに、「産」は、そういう性質を持ったものというように、焦点をしぼってやると。一般的な研究開発、ベンチャー企業を対象とするのでなくて。

例えば、小さな注射針を開発した会社があるとしますね。そんなところは、わりと給料が高く、豊かだったりする。資本が掛かるわけでもなく、小さな企業だが、そのことに関しては世界一というようなところ。

新潟に、記憶合金を使って福祉のスプーンを作る工場があります。そのとても特殊なにぎりぎりが可能となるスプーンについて、新潟が新聞広告に出したら、それが新潟県の産業活動の特質を示すようなことになった。

この周辺は、幸か不幸か、豊田関連の企業があるので、小さいものは消されてしまいが、大府市の中にこそ、目に見えないけど、実際にやると、多くの人の暮らしを豊かにする企業がたくさん出てくると思います。

福祉産業の領域で、大雑把に5兆円とか8兆円だとかいう規模が今でも作られているわけですが、その福祉系の開発を長寿医療センターとかと連携しながら、まち工場を活用するようなことをやると。産業についてはポイントを置いたほうがいい。

今度、都市については、どうだろうか。都市が交通機関等によって、連携されているということは大事なことだが。今、高齢社会を向かえ、単独世帯、夫婦世帯の数が増えていることから、いろんな意味で不安がある。

その不安を全部取り除くには、若い人とお年寄りが地域で一緒に住んで、助け合うような都市空間を意図的に作るのが大事ではないかと思います。

アメリカのアリゾナにサンシティーという人口8万人の都市があります。ここは、20年前は、新興住宅地だったのですが、今は、若者がいなくなり、お年寄りだけが残りました。その残ったお年寄りが何をしたかという、アメリカだからできたのかもしれないが、まちを支えるために一人一人がお金を出し合って、消防から何からまちのために働いた。わずかなお金だけれど、いただくことで、お年寄りたちが生きがいを見つけた。

そうやって、まちの安全、安心を相互に保全した。その結果、今、若者所帯がそこへ入ってき始めた。これは、長い年月がかかっていたことだが、そこから学びとるものは、若者とお年寄りの世代間の混合ですよ。まちづくりにはこういうものがある。

そして、そのようなまちづくりを実現させるには、小さな細胞みたいな集まりがある。どこかに施設ができれば、交流ができるかといったら、そうではない。できるだけ小さくて、人の顔が見え、人の声が聞けるような範囲で。学校や保育所も意図的に配置する。小さな子どもからお年寄りまでが、日常生活の中で連携できるようにやっていく必要があると思います。

まとめると、医療、福祉、職域、食、住が均整できるまち。地元の人が地元で働き、年をとってもなお安心なまち。「医、福、職、食、住、近接のまちづくり」を。それが、一人の優秀なお医者さんよりも多くの健康を確保できる道だと思っている。

僕は妻と二人で、近所の子どもを小さなときから見ていた。その頃、集めて遊んでいた子どもが、今は大きくなって、今度は子どもを連れてうちへ遊びに来ます。

我が家の子どもは、実家を離れているので、あてにはならないのですが、その代わりに近所で見えていた子どもたちが、車が三日も動かないと心配してチャイムを鳴らしてくれます。これは、小さな経験ですが、それを少し意図的にやっていくことは可能ではないかと思います。

今、若者が川原で集まってバーベキュー等やっているが、それで終わってしまっている。そこにお年寄りを入れるとかいう細かい細工がまちの中にあると、本当に人間の温みで暮らすまちになります。それこそ「健康長寿都市おおぶ」を作り出していけるのでは。他の都市に対しても、強く主張できる都市づくりになるのではと思います。

もう一つ、福祉が産業になるかということなんですが。東京大学の生産技術研究所と、

早稲田大学と日本福祉大学で、福祉工学の研究をしているものがあります。かなり先端的で、「目の見えない人が見える」という嘘みたいな話があります。これは、眼球の中に電子回路を置きまして、頭脳の中に映像として、認識させるというものです。

それから、介護ロボット。一番必要なのはセンサーです。人間の肌の温みに限りなく近いセンサーが。そういうセンサーが開発されない限り、いくらロボットに力があっても、介護にならない。そのときに声かけを電子音でなく、アナログで行うとか、そういうことをやれば、重度の人だって、楽になる。

センサーでいうと、ボールを人間と同じような握力で握るロボットが開発されていますよね。そういう研究の要素のいくつかを、大府に呼んできて、ここで研究と開発の仕事をやってもらうのはどうかと。

そのためには、ある程度快適な都市空間を作らなければならない。例えば、フランスのソフィア・アンチポリスみたいなところですよ。そこに来る研究者にとっても快適なまちを。まちには、お年寄りもいて、子どももいて、何かガヤガヤしていると。わざわざお祭り騒ぎを作らなくても楽しめるはず。お祭り騒ぎを作ろうとするから、終わったとき空疎な感じになってしまう。そんなものは、無くして。そうすると他のまちにはないものができると思います。

決まりきった形を破るためには、市民の知恵が必要だと思う。いろんな形をたぐっていくと、たくさん出てくると思います。そういう点で期待しています。

【市長】

若い世代の交流や世代間の交流について、きめ細かいシステムを用意するようなことは、考えていますが。行政がやるには、限界があります。今は、別な形で・・・、例えば協働でとか、NPO とかにお願いをしているところです。

【大沢副会長】

行政がやることについては、限度があつていいと思う。県のレベルでも広げて、やりたいと思います。

人数に限りがあるから、やろうと思っても細かいことはできない。それよりは、NPO を活用したり。ボランティア活動も、タダではなく、再生産できるようにいけない。気持ちだけでは長続きしないし。

そのときは、年寄りも参加させる。老人クラブ、シルバー人材センター、NPO、市民の中でいろいろな経験を持った人を利用する。その代表は誰か等、難しいこともあるが。難しいけど、住民の人にやってもらって、ネットワークを作る。そして、何か問題が起こったときは行政が受け止めるように。

「人間の力を信じること」が基本である。ものはそこから付いてくる。場を作ることも大事だけど、一番大事なのは、ネットワークを作ることです。

【大島会長】

「行政の限界」っていうのは、よくわかります。しかし、行政しかできないこと、行政が関ったほうがやりやすいこと、これをうまくどう使い分けていくかということ。

そのとき感じるのは、「行政の限界」が言い訳に聞こえること。そして、言い訳のシナリオができあがっている。文句が付けにくいような。それを最初に言われると、踏みとどまってしまう。

【市長】

ネガティブな意味ではなく、前向きに進んだ上での「限界」です。

【大島会長】

他にありませんか。

それでは、ウェルネスバレー構想については、これで終わります。

5. 意見交換

【大島会長】

次に、5の「意見交換」について、事務局から説明をお願いします。

【原田】

本日、ご用意させていただきましたのは、資料No.4の「人生80年のライフプラン」というものと、別冊No.3の「高齢者に関する統計資料(その2)」でございます。

まず、資料No.4の「人生80年のライフプラン」をご覧ください。

先日、厚生労働省が平成19年簡易生命表を公表しました。これによりますと、日本人の平均寿命は、男性が79.19歳、女性が85.99歳で、ともに2年連続で前年を上回り、過去最高となりました。

昭和20年代では、「人生50年」という時代でしたが、今や人生80年時代です。仮に60歳で定年を迎えた後、それからの余生は20年あるということです。

この期間をいかに充実したものにできるか、生き生きとした人生が送れるかは、各々が長生きを喜べるかどうか、大きく関わっていくと思います。

また、多くの高齢者が生きがいを持って過ごし、その豊かな経験や知識を社会に活かすことは、都市の活力にも大きく影響いたします。

資料No.4は、「高齢者は弱者とは限らない」という視点で、少し書かせていただきました

た。高齢者は、豊富な知識や経験を持ち、時間的にも経済的にもゆとりのある方が多いと思われま。

本日の意見交換のテーマを「人生 80 年のライフプラン」といたしております。定年までは、ある程度、社会のしくみが出来あがっておりますので、その間、生き方を模索するといったことは、あまりないと思いますが、定年後からのライフプランをどう立てるか、高齢者の活力をどう活かしていくか、お話いただければと思います。

資料No.4 につきましては、以上で終わります。

次に、別冊No.3の「高齢者に関する統計資料(その2)」について、ご説明申し上げます。これは、意見交換に使用するというよりは、高齢者の実態を紹介するための資料としてご提供申し上げたものとご理解いただければと思います。

内容につきましては、目次のとおりでございます。高齢者世帯の世帯数、意識調査、及び世帯主の年齢別の貯蓄・負債の額調査でございます。

まず、高齢者世帯についてですが、1 ページをご覧ください。

近年、核家族化が進み、高齢者世帯も年々増加し続けており、平成 18 年現在、1828 万 5 千世帯となっており、全世帯の 38.5%を占めております。

図の 1 をご覧いただき、昭和 61 年と平成 18 年の割合を比較いたしますと、単独世帯、夫婦のみの世帯のいずれも、6 割から 7 割ほど増加しておりますが、一方、三世代世帯は、半分以下となっております。

次に、3 ページの「高齢者の生活と意識に関する国際比較」をご覧ください。この調査は、昭和 55 年から 5 年ごとに行われている調査で、ここでは、平成 12 年と 17 年のものを併記いたしました。

調査の中身につきましては、省略させていただきますが、このページから 9 ページまで、7 つの質問に対する調査を記載しております。

次に、10 ページの「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査」をご覧ください。この調査は、小・中・高に通う 2,940 人に調査をしたもので、ここでは、4 つの項目について、掲載いたしました。表は、クロス集計となっております。以降、13 ページまで、記載しております。

最後に、14 ページの「貯蓄及び負債」です。この調査は、毎年行われているもので、ここに挙げた数字は、平成 20 年 1 月から 3 月期のものです。

この調査によりますと、年齢階級が高くなるにつれて、貯蓄額は多くなっています。負債額につきましては、40～49 歳をピークに少なくなっており、70 歳以上が全年齢層のうち最も低い額となっております。貯蓄額から負債額を引いた純貯蓄額におきましても 70 歳以上が最も高く、持ち家率につきましても、92.2%と高い数字となっております。

以上、簡単ではございますが、この資料の説明を終わります。また、お時間のあるときにご覧いただければと思います。ありがとうございました。

【大島会長】

ありがとうございました。今の説明について、何かご意見ありますか。

【堀田委員】

こういった会議において、このような資料が出されるのは、仕方がないのかもしれませんが、あまり資料が多いと、個々の姿が見えにくくなるのでは。

個々の幸せがないことには、集団として充実していかないと思います。こういう資料を見ると、全体は見えますが、一人一人の生き方を考えていくときにどういう意味を持つのでしょうか。集団としての姿が見えてくると、返って、それが一人一人の集合だとは見えにくくなるような気がします。

資料を受け取る側も、多くのデータがあると、何を語っていいかわからなくなりますし、物事の本質が見えにくくなるような気がします。

「時間のあるときにご覧ください」というお話がありましたので、そうなのですが、私は、本当にこういう資料が必要かなという感覚を持っておりますので、意見として申し上げます。

【梶岡委員】

堀田さんのご意見も大切だと思います。しかし、私は、この国の資料と同じ内容について、「大府市はどうか」というのが気になりました。一番大切なのは、市民のニーズだと思いますので。大府市は、他と比較してどんな特徴を持っているのかをクリアして、体や社会生活に関するデータについて、経年的な変化を集約しながら積み重ねて、大府市の現状を的確に把握していくことは大切だと思います。

大府市民の方は、研究データ、アンケートにとっても協力的だと思いますので、こういうデータを取りやすい環境にあると思いますから。

【市長】

すでに、社会福祉の分野では、オンリーワンの施策を行っています。30年前の行政事業は、100人や1,000人とかいう単位でないと、税金を投入しづらかったが、今では、一人一人を見ている。例えば、障害の程度に応じた事業とか。担当者は、そうやって、個々の施策を行っているが、一方で、財政や企画担当は、「行政事業というものは何か」という視点で、予算配分をしている。それを我々は、調整しながらやっています。ですから、「時にはこういう資料も使います。」「時には、個々の対応に応じた施策を打ちます」というように。その辺のバランスはとても難しいのですが。

【大島会長】

今の話というのは、本質的な議論だと思います。今まで、社会が大量生産、大量消費の形で来ていて、平均値をとって動いてきた。それが、これだけ増えてきた高齢者が、「最期に亡くなるときにいい人生だったと言える社会がいいね」ということを考えるときに、マスで考えると、冷たい感じがしてしまいます。しかし、限られた資源、限られた状況を考慮すると、平均値をいかに上げていくかに頭がいつてしまう。そこにギャップが生じてしまうが。

個別を意識しながら、全体の資源、しくみをどうしていくかという調和のあり方は、すごく大事だと思います。大事なんだけど、大量生産、大量消費、大量廃棄という今までの考え方を切り離さないと、行きづらい状況に今はあるのでは。

そういうところを抑えた上でのまちづくり。データは必要だけど。データがなければものが言えないというのもよくわかる話なんです。

大沢先生の話に、ヒントがいっぱい詰まっていると思いますので、皆さん、ご自由に話してください。

【大山委員】

テーマとなっている「人生 80 年ライフプラン」ですが、逆に教えていただければと思いますけれど。「社会の重要な構成員としての位置付けとしての高齢者、お年寄り」という話がこの資料にもありますが。元気に社会参加していくという考え方を前提にしていけば、これは、解決できると思うんですが、3番の「老いへの敬意」は、なかなか難しい話ですね。私は、三世代で暮らしていますが、孫や子どもから敬意をもらおうと思うのは、なかなか大変です。

敬う心を確立できるような社会というのは、人が暮らしていく上では一番大切だと思います。今は、そうしたところから逆に離れていくという社会の流れになっているように思います。そんな中で、老いへの敬意を回復するようないいお考えがあれば。

【大沢副会長】

敬意というのは、偉そうなことを子どもに言って出てくるようなものではないと思います。家族には匂いがある。それを共有できるうちはいい。今の時代は、そうではなくなってきた。老いへの敬意を持たせようとする、特段の措置が必要な時代だと思います。

家族というものに、過度の期待をかけて在宅ケアをするというのは反対です。核家族化して、親から子どもが離れている。それを引き戻せと言ってもできない。それほど国際化している。問題は、地域の人たちがどれほど人間的な感情、文化を共有できるのかです。

血縁は大事だと思いますが、もっと大事なものは、地縁です。これは血縁の枠を超えた人間的な繋がりを作り出すこと。ちょうどアメリカの「コミュニティ」のような。アメリカのコミュニティというのは、生きるために皆、共有していた。自分たちの財産や命を守ることを全部自分たちでやっていた。

そういうものは、日本は崩壊している。コミュニティとはいうものの、本当のコミュニティは成り立っていない。もともと村、血族、家族が中心だったから。

しかし、このように基盤が壊れていることを、私たちは客観的に見ている必要がある。

まず、新しい「地縁」。つまり、血の繋がりはないが人間としての繋がりがある地縁が必要。そして「職縁」。同じ職場の繋がり。そして「志縁」。同じ志を持ち、何かをやってみたいと集まる集団。そして「学縁」。同じ学校の集まり。

そういう人間の集まりを、タペストリーみたいにはめ込むことが必要なんじゃないかと。その中には、当然、いろんな知恵、経験を持っているお年寄りがいて。それで生きる場ができる。

例えば、子どもの頃やっていたベーゴマを年寄りが一生懸命やったら、子どもは引き込まれます。二拍子の童謡や民謡のように、民族的なものは、馴染みがあって、共有できる。若いものできないようなことをお年寄りが持っていますから。小さなことですが、そういうものが必要だと思っている。

このように、血縁に捉われずに暮らすしくみができれば、お年寄りは安心して暮らせると思います。お年寄りが助けられるのは、孫とか小さな子どもですね。病床で孫の顔が見えたら脈が正常になったことがあります。人間的に通っている気持ち。孫への愛おしさ。老いへの敬意というのは、そんなさり気ない繋がりでしか、生み出されないと思います。

【大島会長】

大山さんは、三世代家族なんですね。「三世代はこんなにいいんだぞ」というふうには聞こえてきませんが、いかがですか。

【大山委員】

意思の疎通ができていないとは、あまり感じられていないのですが。同じ中において、無意識に感じていることが、実は幸せだったりするのかなと思いました。孫の姿を見れば、心安らくなることは事実ですし、子どもを見れば腹が立つこともありますね。この差は、自分にかかる責任の度合いかもしれないですが。今、自分がいる姿を不幸とは思っていないですが。

【大沢副会長】

三世代は、基本的には幸せだと思いますよ。ただ、僕はいくらやろうとしてもできな

い状況ですが。

【堀田委員】

私は、両方の親から「三世代は嫌だ」と言われました。親としては、ようやく静かな暮らしができるようになったのに、また、うるさい環境は嫌だということらしい。少し離れたところに住み、孫を連れてくるぐらいが丁度いいと。義理の母は、一人暮らしで、寂しいのかと思いますが、「私は私の社会を持っているので、今さら、孫と暮らして『おばあちゃん』にはなりたくない」と。私の親の世代は、「ちょっと離れているぐらいが丁度いい」と言っています。

離れているから敬意も生じるのではないかと。母は、サラリーマンを支えた専業主婦で、何でもできます。料理は上手だし、おもちゃを手作りしてくれます。私の三人の子どもたちは、私が作った料理を食べ、「お母さん、おばあちゃんに近づいてきたね。頑張っているね。」というふうに褒めてくれる。

しかし、一緒に暮らすと、何でもできるおばあちゃんは日常になってしまう。月に1度のことだから、「おばあちゃんってすごいな」と思える。そういう形で、上の世代への敬意を作っていくのも親の務めなのでは。

前回「高齢者」という言葉がどうかという発言をしましたが、私自身が高齢者を枠で捉えていたのではと。その反省もあって、さっきの発言になったのですが。

「高齢者は弱者だけではない」とこの資料にもありますが、本当に正しいと思います。

義母がソーシャルダンスのために、70歳を過ぎて、初めてマニキュアを塗っていました。そのときに、私は「素敵ですね」と言いましたが、実の娘には「年寄りらしく」と言われたそうです。年寄りらしくしたいと思う方がいたり、子や孫と暮らしたいと思う方がいたり。一方で、まだ体も心もしっかりしているから、自分のペースで生きたいという方もいます。「年寄り、年寄りらしく」とかではなく、その人がその人らしく、ありのまま受け入れられる地域の存在が必要なのではないかと思います。おそらく、そのためには、周囲が老いに対して敬意を持つ以前に、一人一人が年を重ねることに対して、誇りを持てること。30代、40代でも、そういう誇りを持てるような社会に流れていって欲しいと思います。

私より若い30代の方が、「肌が衰えた」「朝早く目が覚める」と言って、自らを「年寄り」だと言う。そうではなくて、もう少し、年を重ねるとこんなにあると思えるような訓練を一人一人がしていかななくてはいけないと思います。

アンチエイジングと「年をとってはいけない」というように流れている社会ですが。普通に生きていけば、1年に一つは年をとるわけですから、いろんなところから「年をとることは、いいことだ」という発想が出てくるといいと思います。そうすることで、いろいろな形の老いを「それは違う」と言わない。そんな社会ができると思います。

何かを語るときに、一つの枠が必要だと思ってしまうのですが、まず、その枠を取る

うとする努力が必要なのではと思います。

【大山委員】

私が個々の世界を持ち込んで、恐縮ですが。堀田さんのおっしゃったように全体が幸せになるには、個々の幸せがあってこそ。そのとおりだと思います。やはり、個の幸せが最終的には社会の幸せになっていくのだと。原点が決まっていないと、まちづくりの方向を出そうとしてもなかなか難しい。そこから考えていくことが、大切だと改めて教えていただきました。

【大沢副会長】

一般的に、「多世代がいいね」というときの基本は、財産その他含めて、ある程度継続性を担保することができるベースを持っているということです。三世代の中で一人一人は必ず自立している。そこで手を組んで生きている三世代はすごいんです。

僕は、母子家庭でした。しかし、父親がいなくても、ちゃんとした家族の絆を持っていた。それは、母親が自立していたから。いろんな世代を通して、一番の基本は、人間としてどこかで自立して、支え合っていることだと思います。

同じ味噌汁を飲み、同じ匂いをかぐ三世代家族の中では、「じじいはくさい」などと言う子どもはいない。何故かというそれは、自分たちの匂いだから。そういうことを三世代家族の方には、大切にしたいと思っています。

家族でなくても他人同士でも長いこと付き合って絆を作る。だから、僕はまちの中でもそういうものを作りたがるのです。

団地都市のような中でも、コンクリートの壁を貫いていけばいいのだけど。いくら近くても、気持ちは隔たっていく。その壁をどう破るかが、近代都市づくりの中でも一番大切で難しい問題だと思う。

ウェルネスバレー構想にしろ、大府の都市政策にしろ、その辺りを留意しながらやっていると、ひとあじ違ったまちづくりになるのではと思います。

【市長】

堀田さんからのご提案がありましたが。今回、長寿社会懇話会をお願いした大きな理由の一つは、お年寄りをひとくくりとして考える時代ではなくなったと。それでどうしたらよいかと。個人が生き生きとした長寿社会を作りたいと、そういう発想がありました。

例えば、ネーミングの一つとっても、いわゆる「年寄り」「高齢者」というのが本当にいいかどうか。昔の年寄りの姿はだいたい決まっていて、ピンピンしている人を「年寄り」とは言わなかった。しかし、今は、定年を過ぎたら、ひっくるめて、年寄りと言わざるをえない状況があります。

私も 60 歳を過ぎましたので、老人クラブの会員になっていますが、「老人」と言われるのは、ちょっと抵抗がありますね。ひとくくりではない社会が生まれてきているんですよね。行政はそういう現実を見ながらどういう施策をやったらいいかというのが一つの大きなテーマでもあるのです。

大沢先生のご提案にあった、新しい地縁、職縁、志縁のようなコミュニケーションの繋がりですよね。そういう多様な繋がりも一つだと考えております。

【大島会長】

大沢先生が、先ほどコミュニティの話をされましたが、コミュニティというのは英語ですから「共同体」と言えばいいですかね。

日本は、いわゆる共同体の国だったはず。少なくとも明治以前は、資源がなく、共同体でしか生きられなかった国ですよね。お互いがお互いを助けないと生きていけない生活環境、土地環境、自然環境であった。

これからを考えるときに、昔のような形は無理でしょうが、技術や文化も変わっていますから。しかし、昔あった共同体を何らかの形で再生、又は再構築なのか分かりませんが、あの頃あった良さを何らかの形で再現するのがいいのか、あるいは全く別のものがあるのか。

【大沢副会長】

江戸時代には、高齢者に対して、特段の配慮をするお達しが出た時期がありました。特に知多半島なんかには多かったですね。そういう点でいうと、大島先生が言われるような共同体や連携が、お上^{かみ}とできていた。現代では、仕方ないが。

しかし、人間そのものがそんなに変わっただろうかという、僕はそうは変わっていないと思う。知恵だってあまり変わっていないと思う。そういう意味では、共同体はまだできると思う。

共同体を作るベースは、水田にあった。水耕田は、共同体を作り出す有益な場であり、共同なしでは絶対できないもの。しかも、自然を保存しながらできない。だから日本は世界の最たる緑比率国である。それが今は、田畑がなくなっている。そういう時代だから、その頃にあった共同体を作るのは無理である。

しかし、そういう時代になったけれど、人間が変わっていない。そこへうまく仕掛けられれば、可能かもしれないと思っている。

そのためにコンビニ。コンビニに欠落しているのは、人と人との繋がり、^{いちば}「市場」というのを忘れてのこと。例えば、市場では、買い物すると「おばあちゃん、頑張っているね」という声かけがある。おばあちゃんがおばあちゃんにモノを売っていて、そこには、介護というものがない。市場で買い物したり、魚を売ったりすることで、会話して、健康や自立を保っている。コンビニには、そういう「市場」がなくなっている。だ

から、僕は、コンビニの社長に、市場を復活させるように言っているんです。

郵便、新聞、牛乳配達など、まちのなかで個別に回っている人がいますよね。そのときに、溜まっている新聞を見たらね、回収するのではなく、チャイムを鳴らしてみるとか。そういう小さなことが必要なんじゃないかと思うんです。

ただ、悪い人もいますからね。玄関モニターの設置なんかも必要だと思いますけれど。そういう現代的システムを作ることによって、コミュニケーションができる人と断ち切らなければいけない人を判断して。

とにかく、街中が「声かけ隊」みたいなものを作って、動き回れるような。時間のあるお母さんがいたら、子どもだけでなく、高齢者にも声を掛けるとか。これは、秋田で成功したそうです。犯罪が少なくなったのが一番です。

アリゾナのサンシティも犯罪が減ったそうです。全部声を掛けて回るからです。これは案外やりだすと楽しいんです。それから、「公園デビュー」に悩むお母さんがいますね。公園よりも近くにもっとたくさんの方がいるんですから、そういう人と繋がってほしいんです。

ちょっと大まかなんですけど、そういう現代システムを作ったらいいと思います。

【大島会長】

大沢先生の話は、よくわかりますよね。すごい戸惑いを感じるのは、例えば20世紀になって、科学技術が進歩して、人間のあり様や社会のあり様が変わってきました。それと同時に、これも一つの成果なんですけど、個の権利、個の開放というものが大きく進みましたね。

ところが、違った角度から見ると、大沢先生の話されたことに対する対立的な意見として出てくるのは、一番典型的なものとして個人情報保護法があります。

個人情報保護が言われて、「三日間、寝ていただけなのに起こしやがって、いったい何なんだ」というようなことが一旦問題になると、二度とそんなことはやるまいという社会の風潮がありますよね。

堀田さんとか梶岡さんのように世代の違う方からみると、そういった状況と、「命の方がもっと優先される」と言って、多少の迷惑やおせっかいはあっても許容され、むしろそういうことを幅広く受け入れる状況を作っていくべきだという考え方がぶつかると思うんですが、どうでしょうか。

【堀田委員】

私は、その感覚について、少し寄り戻しが起きているような気がします。私の住んでいるところは、昔、尾張藩のお武家さんが住んでいたところで、大きなお屋敷がたくさんありました。今は、その跡に、マンションができて、若い人たちが住んでいます。

それで、子ども会とか、近所の神社の子ども獅子をやる子どもがどんどん減っている

ことが問題になっていました。昔から住んでいる人もたくさんいるので、お供え物がいっぱいあるのに、子どもが少ない。町内のお祭りがあると、1周してたくさんお菓子をもらうのはためにならないからと言って、町内を5周くらいしてもらって歩き回ります。

どんどん人数が少なくなっていったんですが、それが三年前ぐらいから、小さい子どもの人数が増えきた。それは、若いお母さんが、地域で孤立していくことに対して不安を感じ始めたからのような気がするんです。もちろん、それは名古屋の状況であって、大府市の状況と違うとは思いますが。私の住んでいるところでは、三世代が同居している割合は低いと思いますし。

私たちの世代は、個人の生活を大事にしたいとか。子ども会の勧誘に行くと、「周りに説教されたくないからそういう付き合いはしたくない」とか、「うちは周りに頼らないから、周りを助ける必要がない」とか言われたことも多々ありましたが、今は、そういうことをされなくなりました。

むしろ、私が子どもを連れて歩いていると、知らない人から「最近引っ越してきたんですが、この辺りには子ども会ありますか」とか「地域の子どもが集まるような機会はありますか」というように地域との繋がりを持ちたいという意思表示をされる方も少し増えてきました。急激にいろいろな生活が変わって、「個人」ということが言われていますが、それだけではないということで、今、寄り戻しが来ていると思います。ですから、かつての共同体の再現はできないと思いますが、共同体が消えていくのではなく、新たな形で構築されていくと思います。

【梶岡委員】

個人情報保護というのは、ある年代からすごくこだわる人たちが増えてきたなと思います。学校教育においても、名簿を作っていないので、子ども同士の連絡ができなかったり、親同士でも仲のいい人しか連絡先を知らなかったり。

私よりも若い世代の方が、こだわりが強いように、個人的には感じています。私たちの親の世代なんかは、コミュニティの中で声かけが行われることはすごく大事なことだと思います。

どこかの県で、地域で声かけをし合うことで高齢者と子どもの相互関係がうまくいったところがあって、そこは、全国一、子どもの非行率が低いというデータを出していました。そういう形で有効性が出てくると思います。

個人的には、個人情報保護に固執してしまうと、逆に弊害が起きるのではと思っています。

【大島会長】

いわゆる平均的なところにあったほうが、社会としては何となく住み心地がよさそうな感じがあるのですが、自立とか個別性ということを強調すればするほど、そこから外

れている人で「俺は関係ないからほっておいてくれ」という状況があった場合、どれくらいなら許容されるのか。そんなことは当たり前の話なのか。

【大沢副会長】

だいたい 65 歳過ぎたら、「勝手にしてくれ」とは言いにくいです。70 歳にもなると、一人であることの不安の方がずっと大きいですよ。

だから、まちの中で配慮があるとすればいいですね。言葉で言っても強がりなので、本音のところ、触れあうことが大事ですね。

例えば 40 歳、50 歳で、「あなた元気？」などと言われるのは迷惑かもしれない。ただ僕は、声かけ隊っていうのは、誰かれ構わず話しかけるのではなくて、近所で歩いているときに、「こんにちは」でいい。僕は、この「こんにちは」で、50 人くらい仲間がいます。94 歳から 56 歳までの人で、絵描きを始めとした多彩な人たち。

その人たちと 1 年に 4 回集まって、その人の専門の話の聞いたり、一緒に健康プラザに健診に行ったり。94 歳のおばあちゃんと 56 歳の人と同じことを言っていますよ。「あの人の元気に負けないように」と、両方がお互いに励まし合っている。

そういうことをごく自然流にできるのがいい。まちを歩いているときに声を掛けられたい。僕の友達が、やり方を真似したら「難しい」と言っていたけれど、それは、集まりを作ろうとしていたから難しいのであって。集まるのは、結果だから、繋げようと思ったら失敗すると思う。だから、ごく自然に動けばいい。

カナダの友達の話ですが、誰でも「グッドモーニング」ですよ。知らない人でも。これは本当にさわやかですね。

僕は、毎日 5 時半に散歩しますけれど、会う人会う人に「おはよう」と言います。その中で、犬を連れている人を集めて「ワンワンパトロール隊」を作ろうと言って、黄色いものを付けて散歩します。これだけでも防犯にはいいですよ。

人の輪ができると、「防犯」なんです。犯罪をなくし、人の心の錆びをなくすこともできる。変な形で孤立している子どもたちは、人の輪で救うしかない。

そういうところから始めてみてはどうかと思います。

【大島会長】

大沢先生から、高齢者は寂しいし、「ほっといてくれ」とは言える状況ではないという話が出ましたが。私は、まだ 63 歳ですが、よくわかります。しかし、なかなか自分からは、言いにくい部分もあります。年をとって、肉体的に衰えているのも実感しているし。もっと、年寄りが発言したり、いろんなことを要求したりしてもいいと思うんですが、それができない。あまり表に出ない。

そして、気付いてみると、孤独死が年間 2 万人以上、しかも増え続けている。また、介護殺人、高齢者虐待という問題も起こる。そういったときにいろいろと主張してもいい

いのに「迷惑をかけたくない」とか「みじめな姿を見せたくない」とかいう思いが強くなるんですね。元気で、言ったこと以上にやれるときはいいのが、だんだんできなくなると、話しても責任が取れなくなって、無責任な生き方はしたくないという感覚が強くなるんだと思いますね。そういったことが、それほど自由に言えるような環境もないし、特に弱くなってくると発言する場もないことが、現実にあるのではと思うのですがどうですか。

【大山委員】

自分が第一線で活動しているときは、間違っているかは別として自分なりの自負と自信があるのですが。62歳までは現役でしたが、それを過ぎると生きていくことに対して自信がなくなりました。今は、少し社会の手伝いをする状況ができてきて、それによって自分に対する自信ができたし、もっと頑張らなくてはいという思いができて、一つ一つが明るくなったと感じています。

『高齢者は、お金がなくて、みじめである』ということではない」と資料にありますが、お金はあるかもしれないけど、お年寄りの場合は比較のみじめであると思います。お金をどう使えば自分に自身が持て、楽しくなれるのかがわからない人が多いのではという気がします。

逆にお金がなくても社会参加や仕事があれば、幸せに繋がっていくと思います。今、シルバー人材センターに関わらせていただいておりますが、そこに参加してもらったり、ボランティア活動に参加してもらったり。そういう方向に仕向けていくことも大切だと自分自身、肌で感じています。

お年寄りが加齢とともに病気になるのはやむを得ないことですが、本人にとってはすごく不安だと思います。医療が進歩していますから治ることで、もっと先の不安を感じ、落ち込んでしまう。高齢者は寂しい思いをしている。どんなに充足されていても、家族に恵まれていても、経済的に若干の余裕があっても、いつも少し不安を持っていると思います。

私より年上の方はもっと不安を感じていると想像してしまいます。それを解決してあげようなことを行政が考えていただければ、自信を持って生きていける人が増えると思います。

【大島会長】

時間ということですが、最後に一言だけという方がいらっしゃいましたらどうぞ。

【大沢副会長】

では、一言だけ。人は自分で生きていくことができるうちはいいんです。自分の希望ではなくて、そうでなくなるとき。そのときに、長谷川町子さんが「緩慢に朽ちる」と

言っているんですけど。

自らを受け入れること。体が動かなくなったり、歯がゆさもあると思うんですけど、段々洗い流されていく。これが終末なんです。人間が終末に向かって、どういう準備がしているのかということを僕たちは考えていく必要があると。私自身は、「緩慢に朽ちる」ということは、ちっとも恥ずかしいことではないと思います。そうでないと、あがきながら死んでいくのは困る。どっかで受け入れる面もいると思います。

【大島会長】

年をとることについて、もっと広く理解していかないといけないですし、個人個人の違いだとか、そういったものに十分に配慮する、また配慮できる社会が必要。人や社会との繋がりを意図的にどうやって作り出していくか。こうしなければいけないという社会観念はなくなっていますし、これを装置として意図的にどうやって作り出していくかが極めて重要なことだと。そういうような話が今日は出てきましたね。それを今度は、具体的な方策にどうやって繋げていくかということだろうと思います。今日、たくさんそのヒントが出てきたと思いますので、皆さんよく考えていただきまして、次の会議で、どういう方向で持っていったらいいか考えたいと思います。

今日は、本当にありがとうございました。

閉 会

【広瀬】

ありがとうございました。それでは、最後に副市長から、ご挨拶申し上げます。

【副市長】

本日は、長時間にわたり大変貴重なお話をありがとうございました。

我々なりに、何をしなければいけないか、どこまでできるかということも含めた中で、行政ができる仕掛けづくりを議論していきたいと思いますので、今度ともアドバイスをよろしくお願いします。今日は、ありがとうございました。

【広瀬】

本日はありがとうございました。次回は、10月17日（金）10時から、2階の203会議室で行いますので、よろしくお願いします。